

BASEES : British Association for Slavonic and East European Studies 参加報告書

(2026年4月10日～12日 イギリス・バーミンガム)

廣田 千恵子

日本学術振興会海外特別研究員（オーストラリア国立大学）

2022年度奨学生

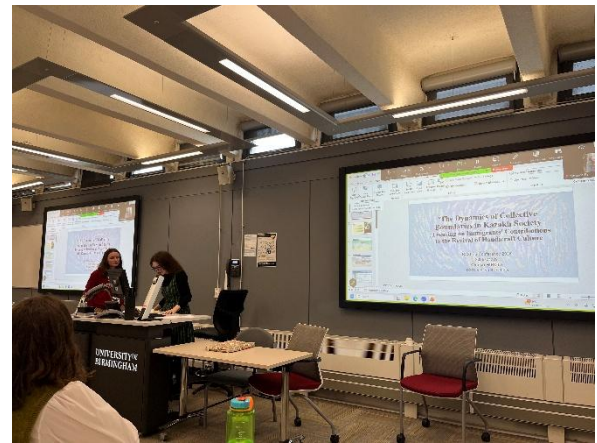
2026年4月10日～12日に、イギリス・バーミンガムで開催された BASEES にて口頭発表をおこないました。BASEES (British Association for Slavonic and East European Studies) とは、ロシア、東欧、および旧ソビエト連邦の研究を目的とする英国の学術団体で、毎年春にイギリス国内で学会が開催されています。



【学会会場 1】

私はバーミンガム大学のナジェジダ・マーモントヴァ助教が立てたパネルで発表しました。パネルの目的は、ロシア国境沿いでロシアによって分断された歴史をもつ先住民コミュニティに着目し、ポストソビエト空間における彼らに対する国境の多様な影響について検証することにあります。このパネルの中で私の報告は、カザフスタンにおける民主化以降の手工芸文化復興の経緯と、複数のカザフ人移民作家の作品の分析およびインタビュー結果の紹介を中心に、移民の社会的統合と分離の動態を明らかにするというものでした。このテーマについては、博士論文提出後から取り組んでおり、まだ十分に調査ができていたとは言いがたかったのですが、20世紀につくられた国境がそれを取り巻く人々・集団に与えた影響についての問題提起をおこないました。そのほか、

パネルでは、サーミ、サハ、トゥバなどロシアの先住民が、国家権力あるいは社会的マジョリティとの関係の中で抱えている諸問題についても取り上げられました。



【学会会場 2】

学会では初日と2日目に基調講演がおこなわれました。初日の講演内容は、マンチェスター大学の Elena Barabantseva 氏による、ロシアと中国の国際結婚に関する文化人類学的調査の成果についてでした。中国において国際結婚は国家安全保障対策の一環として捉えられており、とりわけ多くの中国人女性が外国人、特にロシア人と結婚していることが指摘されました。また、ロシア人女性にとっても、中国人男性との結婚は教育や労働の機会を得るための手段として位置づけられています。報告では、中国における「人種的資本」の価値、結婚生活を維持するために求められる感情労働、そして2022年のロシアによるウクライナ侵攻のような地政学的出来事の影響などについても触れられ、この結婚がアイデンティティ、ジェンダー、人種、国家安全保障といった複数の

社会的問題と関わるものであることが強調されました。

2日目の基調講演は、Thomas de Waal氏による、ロシアの「近隣諸国 (Near Abroad)」という概念の変遷と衰退、特にソ連崩壊後の状況についての講演でした。主な論点としては、CIS (独立国家共同体) の制度化、ロシアによるソフトな統合プロジェクトの失敗、そして中国やトルコといった新興大国が及ぼす影響などが挙げられました。同講演の中で 2022 年のウクライナ侵攻は、同地域におけるロシアの特権的な影響力の終焉を告げる転換点として位置づけられました。また、地域情勢の動向や外部勢力の役割、欧州への波及効果についても言及され、ウクライナの欧州における未来を支えるためには、戦略的ビジョンと合意形成が必要であることが強調されました。

そのほか、学会全体としては、ウクライナに関する社会的・文化的諸問題に関するパネルが多く、ヨーロッパにとってウクライナ問題がいかに自国の安全保障問題と直結しているかを象徴しているかのようでした。



【ロンドン 街中の桜】

最後に、旅程全体で感じたことを雑感として述べます。イギリスは 2025 年 3 月にもオックスフォードで開催された学会に参加するために訪れていますが、その時よりも物価の高さを感じました。円安が進んでいることと、社会全体のモノの値段が上がっていることによりますが、食費が日本の 3 倍かかったことが印象的でした。ロンドンと言えば雨というイメージですが、わたしが滞在した数日間には東京の初夏のような陽気で、快晴でした。一方のバーミンガムは札幌の春のように肌寒く、念のため持参した上着が役に立ちました。どちらの街も、桜が綺麗に咲いていて、心地よい季節を楽しむことができました。